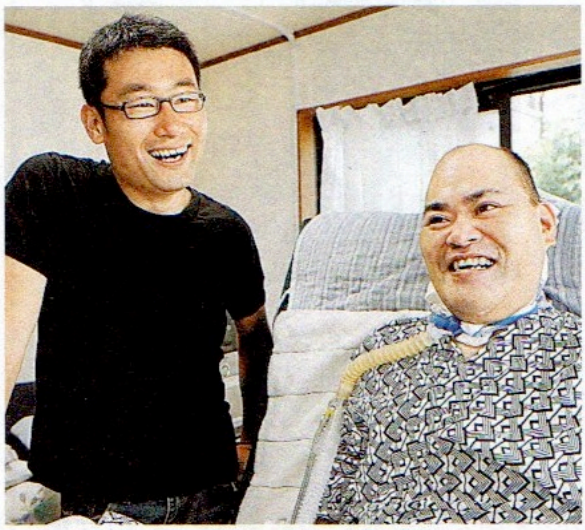
生きる まひの体と

交通事故で首から下がまひし、一度は死も考えた男性が、人とかかわりながら生きる力を取り戻していく。そんな2年半を追いかけたドキュメンタリー映画「生きていく」が完成した。「障害のある人だけでなく、生きることに悩む若い人にも見てもらいたい」。監督の神吉良輔さん(36)＝兵庫県芦屋市＝は上映会の希望を募っている。（編集委員・神田誠司）

事故で障害の男性、映画に

主人公は兵庫県尼崎市の池田英樹さん(36)。27歳の時、自転車で通勤中に乗用車にはねられ、首の骨を脱臼して頸髄を損傷した。しゃべることはできても、両手足は動かず、人工呼吸器がなければ生活できない。「殺してくれ」。そう訴える池田さんを両親らが辛抱強く励ました。



池田英樹さん（右）と神吉良輔監督。同い年ということもあってカラオケや食事に行くなどプライベートでも仲がいい＝兵庫県尼崎市、滝沢美穂子撮影

喜び、悩む姿を見て

気持ちが切り替わったのは事故から1年半後。「元の体に戻ることはない。悔いを残さないように思いっきり生きるんや」。介助を受けながら電動車いすで積極的に外に出るようになった。

そんな池田さんを映像作家の神吉さんが知ったのは3年前。兵庫頸髄損傷者連絡会のシンポジウムで、会員の一人である池田さんの日常を紹介する10分ほどの映像が流れることになり、その撮影を請け負ったのがきっかけだ。

友人とカラオケに出かけたり、時に日帰り旅行をしたり。競艇場や居酒屋にも出かける。引きこもる障害者も多い中、ささやかな喜びを積み重ね、前向きに生きようとする池田さんの姿に、映画の自主制作を思い立った。

2007年から2年半かけて撮りためた110時間のフィルムを86分に編集した。これまでホームレスの人や障害者らを映像に収めてきた神吉さんにとっても、初めて1時間を超える映画になった。

カメラは8泊9日の北海道旅行を追う。「世話をかけっぱなしの両親に雄大な自然を見せたい」と池田さんが計画した。ワゴン車での移動中に人工呼吸器のバッテリーが切れそうになるトラブルをボランティアとともに乗り切るシーンはスリリングでもある。

同じように交通事故で首から下がまひした人が「何事も恐れず、人生を楽しもうとする姿に影響を受けた」と語るインタビューや、北海道旅行の後で「長続きする目標が見つけられへん」と落ち込む池田さんの姿も収めている。

神吉さんは「障害の有無にかかわらず、人はどう生きていくか悩む。達成感と喪失感を繰り返しながらも人生を切り開こうとする池田さんの姿は心に届くと思う」という。

映画撮影後、池田さんは長く続く目標を見つけた。同じような経験を持つ相談相手がいなくて悩んだことから、「自分の経験を少しでも役に立てたい」と考えた。そのための専門知識を得るため、今秋から専門学校に通ってカウンセラーの資格を取ろうとしている。

「生きていく」は上映会だけの希望も受けつけるが、神吉さんは「できれば池田さんとの交流もセットで企画してもらえれば」と話している。問い合わせは神吉さんのメール（ryosuke@fmail.plala.or.jp）か携帯電話（090・2593・4910）へ。

頸髄損傷

背骨の中を通る中枢神経の束（脊髄＝せきずい）のうち首の部分を頸髄という。交通事故やスポーツなどで首の骨を骨折・脱臼すると損傷する。頸髄は脳に近いため、重い障害が残り、自発呼吸ができず人工呼吸器に頼る人もいる。頸髄損傷者だけの統計はないが、脊髄損傷で四肢まひになった人は厚生労働省調査（2006年）で2万4600人。